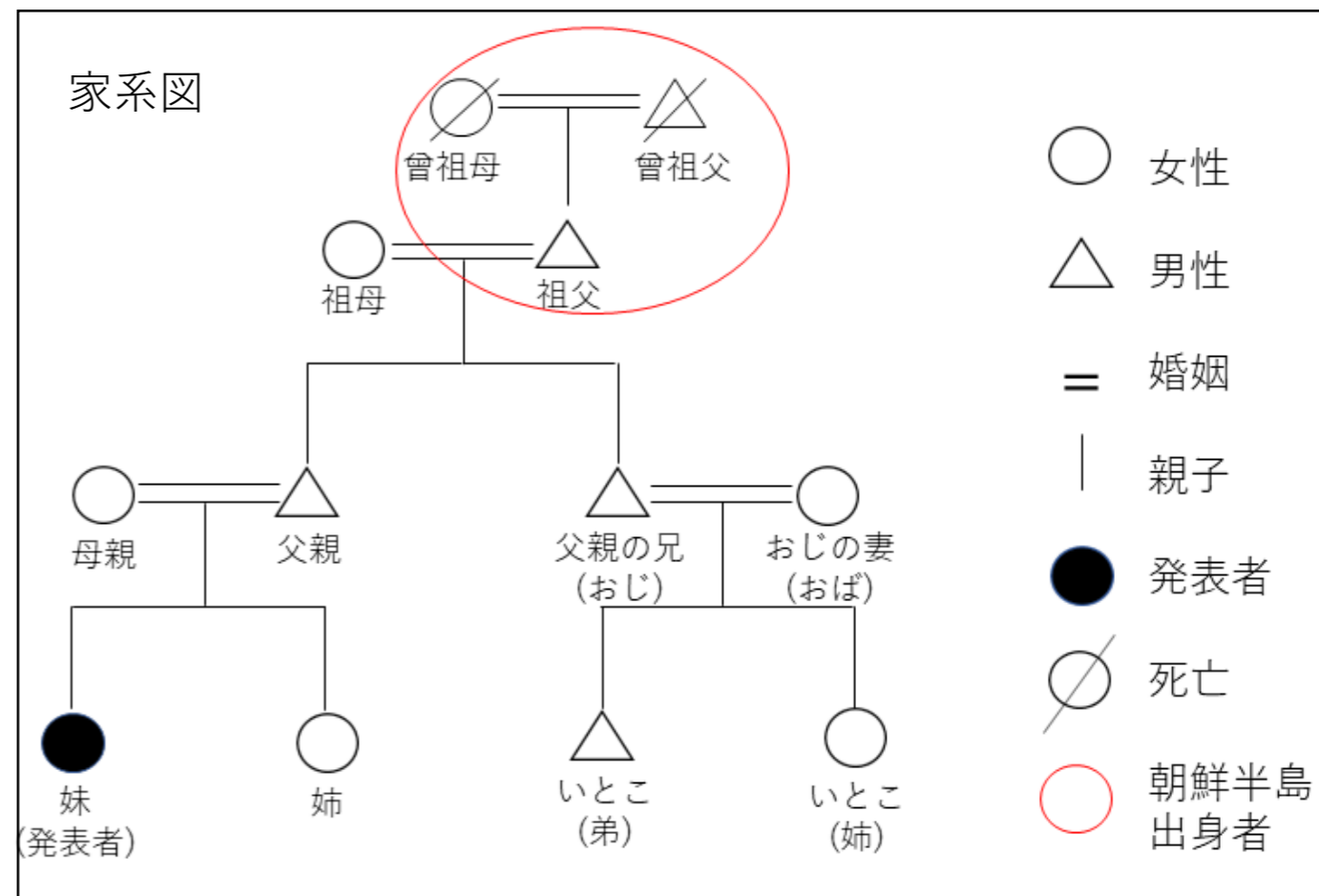


タイトル	日本における儒教的祖先祭祀 ——チェーサとの比較——		
所属	南山大学人文学部人類文化学科	氏名	山田真紀

調査しているのは発表者の父方の実家での祖先祭祀儀礼である。現状はその祭祀の様子を記述することを目的として卒業論文研究にしている。

右の家系図での親戚が祭祀儀礼に参加している。主として仕切るのは祖母であり、準備は女性陣によって行われる。祭祀儀礼ではメインは男性に代わる。

このように、ルーツを朝鮮半島の儒教にもつということから、朝鮮半島での祭祀儀礼や在日朝鮮人社会の祖先祭祀などと比較している。



今回は、梁愛舜『在日朝鮮人社会における祭祀儀礼—チェーサの社会学的分析—』(晃洋書房2004)に記述される「チェーサ」(祭祀の朝鮮語読み)という祖先祭祀儀礼と比較している。

梁はチェーサとは在日朝鮮人社会が異郷において祖先との結びつきを堅持し、民族的なアイデンティティを再生産することで固有の集合表象を保持するものであると説明する。(p.1)ここからは基本的なチェーサの形式を記述する。

チェーサで祀るのは男子直系で四代前の高祖父までが一般的で、位牌や燭台、祭床などの祭器や祭具を用い、お供え物の料理を祭需として位牌の前に並べる。

供え方は地域や家庭ごとに違うので、あくまで原則がありそれにそれぞれ従っていると述べておく。具体的な供え方の例は図1を参照してほしい。詳細な説明は今回省略する。

祭需を供えた後は儀礼を行う。香を焚き祖霊を迎えた後酒杯をあげると、現代では省略されることが多いが祝詞を読み上げる。そうしたのちもう二度酒杯をあげる。こうして食事を終えた祖霊が去る儀礼を行うと、参加者みんなでお供え物をいただく。かなり簡単なものになったがこれが大まかな流れであり、発表者宅でも大体同じ流れで行われる。

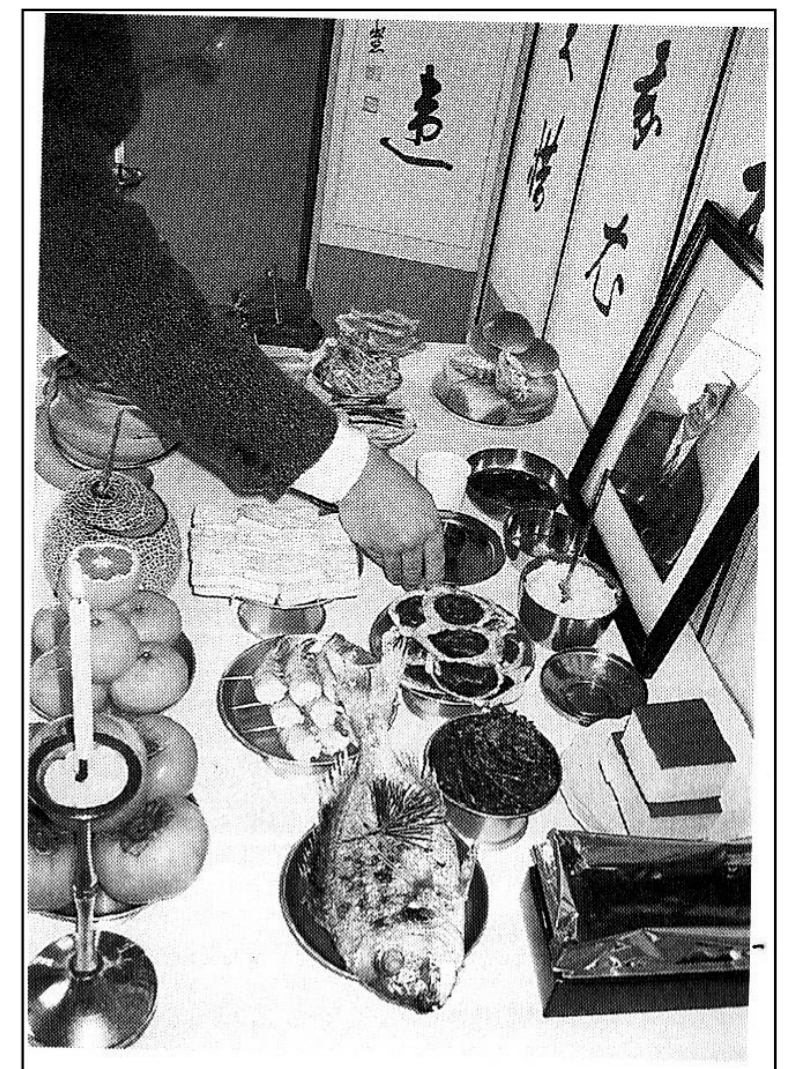


図1 (梁 2004 p.199)

チェーサを行うことで故郷と繋がり、故郷を忘れまいとしているという説明がなされるが、発表者の家での儀礼ではそのような考えはかなり薄くなっているといえる。家庭ごととはいえ、伝わった儀礼は世代交代とともに主体も実情も形式も変化し、またいつか消えていくものであると仮説を立てている。

今や我が家では日本人である祖母が主として遠い祖先でなく、彼女にとっての舅姑の曾祖父母のために儀礼を行っている。もはやこれはチェーサではないというのが発表者の考えである。方法こそ似通っているが、行う人の考え方、とらえ方の違いが比較によって如実に表れたといえる。



図2 2018年元旦に撮影
これは儀礼の後、祭需を参加者全員でいただくために食卓に並べているところである。焼いた魚や野菜のナムルなどいくつか図1と類似点があるのわかる。

参考文献

梁 愛舜

『在日朝鮮人社会における祭祀儀礼—チェーサの社会学的分析—』 晃洋書房 2004

図1 p.199